

新刊批評

▲「明治の婦人」 毎月一回五日發行

一冊定價八錢 郵税五厘

發行書肆と行き違の事にてもありけるか、二ヶ月許り休刊の後今回再び生れ來りぬ。表紙繪麗はしく口繪頗る眞面目なり、其内容はと見れば初刊あたりのハイカラ的文學的材料は餘程減じたる代りに、極めて眞面目なる家庭的材料を増しぬ希くは健全なる發達を望む。(發行所東京市四谷區内藤町一番地ろノ十八號明治の婦人社)

▲みづ畫、毎月一回三日發行一冊郵税共拾八錢

水彩畫の普及を計る月刊美術雜誌にして、毎號極めて精巧なる石版繪はがき二三葉を挿み、且附するに眞切なる説明を以てし初學者のために

指導を與へたり。其他三宅克己外數氏の寄稿及び講話などありて斯道熱心の人には最良の好伴侶なる可く畫かぬ人とても繪はがきを求むるによかる可し。

▲家庭女學講義 毎月一回三十日發行一冊金拾錢  
本誌は家庭婦人界の一女丈夫羽仁もと子女史の編輯する處にして二ヶ年を以て女學の全部を完結する様、一定の豫案を立て、題目毎に夫々適當なる名家に委嘱して講義せしめたるものにして、第一號には浮田和民加藤照磨等の諸氏見ゆ。平民的に家庭學の一般を知らんとする人には最も適當なるものなり。

▲女子時事新聞 毎月三五ノ日發行一部金五錢  
全紙悉く女子の手に成りし婦女新聞的八頁のもので其發行の辭に曰く

世運の進むに伴ひまして、近時女子に關する新聞、雜誌、著書と、中々澤山に出版されますが、大抵は男子の手によつて出来ましたもので、女子自身で致したといふのは、殆んど皆無の状態ですが、女子は言論の機關を自ら能く經營し得る能力が無いのでしようか？、思ひますに女子を知るものは矢張女子に如くはなからうかと存じます、隨ひまして女子に關する問題は、女子自身に講究し解決すべきものでしようと思ひます、男子の女子問題は動もすれば臆測空斷に流れ勝ちにて實に遺憾な次第で御座います、然るに女子は自己實際の境遇に鑑みまして、言論しなますゆへ、其適切なるは、必らずしも智者を俟たずとも、瞭然だらうと存じます、  
 以て其抱負を知る可しです。論說あり雜録あり

五十二  
 女學校だよりも詳しく一針録も面白し、

▲日曜讀本

東基吉著  
 弘道館發行

定價金拾五錢

其名の如く日曜などに兒童の要求する讀みものとして現はれたるものにて、不知不識の間に兒童の興味を導きて地理、博物、理化學に關係せる卑近の知識を得しめんとて、種々他方面に亘りて面白く物されたり。家庭への土産物や父様母様よりの御褒美用として至極適當なるものと云ふ可し。

▲東亞之光 毎月一回 日發行 弘道館發行

新雜誌の發行せらるゝもの近來頗に其數を増したるが其中にありて多少異色あるものを東亞の光とす。蓋し軌近精神問答の勃興に際し是が解決を期すと云ふ。主張の本に生れたる帝國文學的の雜誌にて博士井上哲次郎氏之を主幹すと云ふ。